

P1-202 FDG-PETによる婦人科癌の骨盤内リンパ節転移の術前評価

香川大周産期学婦人科学¹, 香川県立保健医療大保健医療学部²犬走英介¹, 大野正文¹, 秦 幸吉², 花岡有為子¹, 金西賢治¹, 山城千珠¹, 田中宏和¹, 塩田敦子¹, 秦 利之¹

【目的】術前の子宮頸癌, 体癌, 卵巣癌症例における骨盤内リンパ節転移の評価に関して, FDG-PETとMRI, CTの診断精度について比較し, その有用性について検討した。【方法】2003年4月より2006年8月までの期間, 子宮頸癌(33例), 子宮体癌(45例), 卵巣癌(23例)の初回手術で骨盤内リンパ節郭清を行った症例を対象とした。術前にFDG-PET, MRI, CTを行った。総腸骨領域, 外腸骨領域, 内腸骨/閉鎖孔領域のリンパ節郭清を施行し, 病理組織学的にリンパ節転移の有無を確認した。【成績】子宮頸癌ではPETでは感度70.0%, 特異度95.6%, 正診率87.8%, 陽性的中率(PPV)87.5%, 陰性的中率(NPV)88.0%であった。MRIは感度50.0%, 特異度100%, 正診率84.8%, PPV100%, NPV84.8%であった。CTでは感度70.0%, 特異度91.3%, 正診率84.8%, PPV77.7%, NPV87.5%であった。子宮体癌ではPETでは感度50.0%, 特異度94.26%, 正診率84.4%, PPV71.4%, NPV86.8%であった。MRIは感度40.0%, 特異度97.1%, 正診率80.04%, PPV80.0%, NPV85.5%であった。CTでは感度40.0%, 特異度91.4%, 正診率80.0%, PPV57.1%, NPV84.25%であった。卵巣癌ではPETでは感度75.0%, 特異度100%, 正診率95.6%, PPV100%, NPV95.0%であった。MRIは感度50.0%, 特異度100%, 正診率91.3%, PPV100%, NPV90.4%であった。CTでは感度50.0%, 特異度100%, 正診率91.3%, PPV100%, NPV90.4%であった。子宮頸癌, 子宮体癌, 卵巣癌においてPET, MRI, CTによる骨盤内リンパ節評価に関する感度, 特異度, 正診率, PPV, NPVに関して有意差を認めなかった。【結論】FDG-PETによる婦人科癌の骨盤内リンパ節転移の術前評価はCT, MRIと同等の診断精度であることが明らかとなった。

P1-203 術後婦人科悪性腫瘍患者におけるFDG-PETの有用性についての検討

奈良県立奈良病院

井谷嘉男, 水田裕久, 平野仁嗣, 河 元洋, 豊田進司, 平岡克忠

【目的】グルコース代謝の亢進部位を画像化するFDG-PET検査(PET)は悪性腫瘍の微小病変の検出に有用であるとされる。術後婦人科悪性腫瘍患者においてPETが再発・残存腫瘍の検出に有用かどうかを後方視的に検討する。【方法】2005.3—2006.9の間, 当院にてPETを行った術後婦人科悪性腫瘍患者で, CT, MRIの経時的変化や開腹術により腫瘍の有無について臨床的な評価が確定した症例を対象としPETの腫瘍検出力を評価した。【対象】評価対象となったPETは31回(29例)に施行された。年齢中央値は55歳(40~76歳)であった。疾患は卵巣悪性腫瘍12例(14回), 子宮体部悪性腫瘍10例(10回), 子宮頸癌7例(7回)であった。PET施行時, 臨床的再発所見無し7例, 腫瘍マーカーの上昇12例, その他の異常所見11例, 再発治療後3例, 術前化学療法後1例, 患者希望1例であった(重複あり)。【成績】PETの腫瘍検出力の感度は88.2%(15/17), 特異度は85.7%(12/14)であった。陽性的中率は88.2%(15/17), 陰性的中率は85.7%(12/14), 陽性尤度比は6.17で, 陰性尤度比は0.137であった。PET陰性であったが腫瘍陽性とされた2例は卵巣癌患者であった。1例は再発治療後で経時的なMRIにより増大するリンパ節を認めPETにも3ヶ月後に集積が確認された。もう1例は術前化学療法後でinterval debulking surgery時に粟粒大の腹膜播種と郭清した後腹膜リンパ節に腫瘍組織が確認された。【結論】術後婦人科悪性腫瘍患者においてもPETは腫瘍病変の検出には有効である。しかし現在のPETの解像度では微小な病変を検出できないことがある。よってPET陰性場合には安易に腫瘍なしとすべきではなく従来の検査法を併用し慎重に判断すべきである。

P1-204 婦人科疾患におけるPET/CT検査の有用性

東海大磯病院¹, 東海大², クリニック杉原³, 綾瀬厚生病院⁴信田政子¹, 村上 優¹, 石黒葉子¹, 塚田ひとみ¹, 菊池公孝¹, 三上幹男², 杉原義信³, 篠塚孝男⁴

【目的】最近婦人科疾患でもFDG-PET検査とCT検査が同時に可能なPET/CT検査が使用可能となりその応用が期待されている。しかしどのようなときにPET/CT検査が有用であるか, またFDG-PET検査より有利な点は何かなど未だ明確ではない。そこでこれまで実施したPET/CT検査を検証しその有用性を検討した。【方法】対象は子宮腫瘍14例, 卵巣癌術後11例の計25症例に28回, PET/CT検査をおこなった。その目的は, 腫瘍の良性悪性の鑑別診断が9例, 癌再発部位同定目的が16例であった。いずれも従来の検査では確定診断の得られない症例におこなった。【成績】25症例28回のPET/CT検査で陽性12例(48%)であったが1例は偽陽性であった。11例(44%)において悪性腫瘍の部位同定が得られた。再発部位は後腹膜リンパ節転移が9例, 腹腔内転移が1例であった。卵巣癌術後軽度腫瘍マーカー上昇を伴った症例では, PET/CT検査により骨盤内の多発小腫瘍腹腔内転移が判明し, 手術療法から化学療法の治療方針が変更になった。リンパ節転移に限局した再発と判明した例には放射線療法をおこなった。またPET/CT検査により部位同定が正確になり, 卵巣や膀胱尿管などへのFDGの生理的集積との鑑別が容易になり, 臨床的に偽陽性を低下できた。【結論】PET/CT検査の導入により再発の部位同定が容易になり, より正確な治療方針決定に有用である。